

～子どもたちの成長があるから～

絶えず自問自答する中に【自分には何が出来るのか?】というのがあります。この【自分には何が出来るのか?】の自問がここ最近さらに強くなってきてしまいました。活躍している人を見ると、ついつい(うらやましい)と思う気持ちもズブッと大きくなってしまいました。“他者(ひと)と比べたらダメ。じぶんはじぶん” と言い聞かせるのですが、どうしてもうらやましく思えてしまい、私なんか…思ってしまうじぶんがいるのです。そうした時に、心を救ってくれるのが、やはりそろばん教室に来る子どもたち。この子たちが自らの意志でそろばん教室に来る姿にとっても元気づけられるのです。しっかりしなきゃと思うのです。子どもたちの成長が活動を通して見られるのも元気づけられる一つです。そろばん教室に通う子どもだけではありません。アフィフェ村の学校で活動を始めた頃に生徒だった子どもが先生となって学校に戻ってきたり、普段は寄宿舎生活だけでも学校がバケーションに入り村に戻ってきた生徒に会ったりすると、とてもうれしく思うのです。また、私にはアフィフェ村に大切な友だちがいます。オトナムというダウン症の女の子です。アフィフェ村に初めて来た頃に仲良くなった女の子です。アフィフェで活動をし始めた当初、肌の色の違うよそ者は私一人。いまでもエウエ語の外国人、白い肌の人を意味する「ヤブゥ」「ヨブゥ」は言われるけれども、アフィフェ村で活動し始めた当初は、うんざりするほど毎日言われました。けれども、オトナムはお姉さんと妹がデバインに通っていたこともあって私を決して「ヤブゥ」「ヨブゥ」と呼ぶことなく最初から「トシコ」と呼んでくれたのです。出会った当時がおそらく8～10歳だったので今は16歳くらいになっているかと思います。出会った頃、小さい妹にお世話をされていたオトナムは、一人ではアフラオロードを横断できないからという理由で、アフラオロードを渡らないと通えないデバインアカデミースクールには通わず、道を渡らなくとも通える学校に行っていたのです。そのオトナムが日曜日の教会の帰りにそろばん教室にいる私を見つけて声をかけてくれるのです。オトナム一人の時もあれば、大人と一緒にの時、自分よりも小さな子どもを連れている時、どんな時でも声をかけてきてくれるのです。オトナムに会えた時は、必ずハグをします。オトナムのハグは本当にやさしくて、まだまだ私頑張ると思えるのです。子どもたちの成長を見ながら、自問自答の繰り返しの中ぶれない心折れない心を盾に進んでいくのでしょうかね。

2018年6月13日 ガーナ挨拶 No 17

国分 敏子

